かささぎ 通信 第104号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2021年 6月 11日 発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年五月の「森三郎の作品を読む会」では「燈台に羽が生えた話」（一九三七年十月）を読みました。

「燈台に羽が生えた話」は『お話の木』（主宰・小川未明、一巻六号、pp.32-35）に掲載された童話です。一九三六年十月の『赤い鳥（鈴木三重吉追悼号）』からちょうど一年後で、『赤い鳥』最終号発刊後、森三郎が初めて発表した作品です。後に『三年生の童話　お話の泉』（一九四九年三月、東京一陽社長野分室）に再録されています。次のようなお話です。

毎日一つ所に立っている燈台に、鴎（かもめ）が「私みたいに羽があって、海の上を飛んでみたくありませんか」と聞きます。その気のない燈台に、鴎は自分の羽を無理矢理とり付けます。初めて空を飛んだ燈台はすっかり嬉しくなって、一時間ほど羽を貸してもらい、ある島に着きます。そこはちょうど王様が亡くなったばかりで、島中の一番力の強い男を王女さまのお婿（むこ）さんに迎えて王さまにしようとしていました。力自慢の男たちが誰も自力でつぶすことができなかったのに、燈台は海亀の甲羅を難なくつぶしたので、お婿さんになり、王様になって皆から崇められて暮します。しかし、三年ばかり経ってから、ふと鴎のことを思い出した燈台の王様は、昔のあの海辺に飛んで帰ります。そこでは羽のない鴎がじっとこちらを見つめていて「燈台さん、あなたもずいぶんな人だ」と、怒りつけます。燈台に付いていた二つの羽は、懐かしい昔のご主人に会ったので大喜びで鴎の背中に取りつきます。鴎は燈台に「もうあなたに羽を貸すのはこりごりですよ」と、飛び立っていきました。

この燈台のように、一か所にじっと立っていることが退屈ではないだろうかという発想は、『赤い鳥』一九三一年九月号掲載の「赤いポスト」にもありました。

「あああ、つまらない。こう、毎日毎日同じところにつっ立ってばかりいちゃあ退屈でしょうがない」と、ある晩、ポストが歩き出す話でした。「赤いポスト」はローズ・ファイルマンの作品を森三郎が再話し「須川よし子」の名前で発表したものだということは、これまでにも何回か触れて来ました（「かささぎ通信」59号）。このテーマが三郎にとっても興味あるテーマであったと想像できます。「燈台」の場合は自分から望んだのではなく、鴎に無理矢理羽を付けられるのですが、自分で動けることを知った燈台はその自由さの虜になります。また、王様の威光を笠に着て鴎から借り物の羽を取り上げようとしたり、嵐で方角が分からなくなった時、浜辺に燈台が無いからだと気づいて「海軍大臣は何をしているのだ」と怒ったりしていて、滑稽な感じです。それは逆に、一つ所にじっと立っている燈台の役目の重さを示す結果になっています。燈台守の老夫婦の様子にも滑稽味が溢れていて、森三郎が自由奔放に表現しているような気がします。『赤い鳥』という大きな存在からの解放感が出ているのではないかとさえ思われます。

挿絵は小川哲郎、『お話の木』主宰の小川未明の次男で当時二十歳でした。航路を照らす威厳のある顔と、王様の冠を頭に頂きながら、鴎に叱られた情けない顔の燈台との対比が面白いとの感想が出ました。

燈台に羽を付けることを勧めた鴎が、燈台の立っていた岩の上で三年間ずっと待ち続けて、「もうこりごりだ」と怒るところなども思わず笑い出したくなります。これまで読んできた作品の中に、「鳥」をモチーフにしたものがいくつかあったことも話題になりました。「かささぎ物語」「けんかの後」「杉でっぽう」「三国峠」「雀とり」「夕顔物語」「木鼠おばさん」「鸚鵡」「春告鳥」などです。

今回の作品には笑い話のような描写がいくつかありましたが、これも森三郎の特徴です。次回の「読む会」からは『赤い鳥』のコラム「昔の笑話」に目を通していきます。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品（二〇二一年七月九日実施予定）
『赤い鳥』の中の「昔の笑話」No.2